

## 日本のこころ②「源氏物語」紫式部

### 1 ウォーミングアップ

①「源氏物語」にハマる

②絵空事

③老若男女問わず

④正反対のキャラクターだが気が合う

⑤天涯孤独

⑥防犯カメラ

⑦集合場所

⑧四季折々の美

⑨空気を読む

⑩河川敷

⑪病院をたらい回しにされる

⑫苦しい時の神頼み

⑬勸善懲悪

⑭籠城

⑮陰湿ないじめ

⑯残暑厳しいころ

⑰生みの親より育ての親

⑱陰に陽に

⑲板挟みにあう

⑳ギョツとする

## 2 翻訳

①春夏秋冬の自然が移ろいゆくはかなさに心動かされる「あはれ」が「源氏」に通底する美意識とするならば、寅さんの美意識は「一宿一飯の恩義」、「旅は道連れ世は情け」など、義理人情をベースにした「粋」で「いなせ」な態度である。

②僧都たちは廃寺で倒れている彼女を見つけると、まず彼女が物の怪ではないかと疑った。つまり、精神的に一度死に、記憶喪失という廃人寸前の人間は、妖怪変化扱いだったのだ。

③押し殺した強い嫉妬が生霊となり、葵上、紫の上、女三宮など、光源氏が愛した女たちに次々ととりついて命を奪う、と光源氏らは考えている。

④本来の仏教では、生き物が死んだら輪廻転生すると教えており、物の怪のような中途半端な存在は認めないはずだ。仏教を理解しているはずの高僧でさえ物の怪の存在を疑うのは、中華文明が土着化した「国風文化」そのものではなからうか

⑤「あはれ」とは、四季折々、刻一刻と変化が絶えない四季と人の世ではあるが、その時その時の変化に心の底からしみじみと心を動かされることをいう。

⑥南庭は、「左近の桜、右近の橘」を除いては真っ白な砂利が敷き詰められているだけである。が、この「空」、「間」が見る者に「場をわきまえよ」とばかりの無言の圧力を与え、襟を正さざるをえない。

⑦七百年以上にわたって「武士」という名の軍人が権力を握った。日本史は聖徳太子の時代から現代にいたるまでの半分以上、軍事政権だったといえるが、御所はこの間「治外法権」下にあった。武士たちにそれを認めさせたのが、皇室の権威と平安貴族の文化だった。

⑧男は娘を皇室に嫁がせ、将来の帝となるべき男子が生まれたり、その摂政・関白として権勢を牛耳る。同じように考える他の貴族に関する根も葉もないでっち上げなど、様々な画策により陥れることなど日常茶飯事であった。

(宿題はここまで)

### 3 通訳 (受講日までご覧にならないでください。)

- ① 三歳の頃、母親の桐壺に死なれた源氏は、後に母に生き写しと言われた藤壺や、その姪の紫上を求めようになる。母の死が正常とは言えない女性遍歴に影響を与えたようだ。
  
- ② 「源氏物語」を愛する人は、極楽浄土を思わせる平等院鳳凰堂に往時を偲び、隣接地の源氏物語ミュージアムでこの名作の「おさらい」をする。宇治一帯はまさに「源氏物語」の世界を目で見て耳で聞いて感じられる場所なのだ。
  
- ③ 秋にこの山に登ると、ちょうど平等院の方向に陽が沈む。この世からあの世に向かう途中には海があるというが、この展望台がこの世、宇治川が海、そして平等院のあるあたりが極楽なのだろう。

- ④ 梅やツツジや紫陽花が咲いても、蝉が鳴いても、月を見ながら秋風が吹いても、寒い日の朝の雪化粧を見つけてもみな「あはれ」であると同様、子どもが生まれても、元服しても、嫁に行っても、そして家族が亡くなってもみな「あはれ」なのだ。
- ⑤ 御所を訪問するには宮内庁に申請すれば確実であるが、日時によっては飛び入りでも可能である。団体行動のみで、自由見学はできない。
- ⑥ 東洋では王者は北に王宮を築き、高御座に座り、南を向き、北京もソウルも京都もそれに従っている。しかしここは堀や石垣で囲まれているわけでもない。高さ数メートルの土塀で囲まれているだけなのだ。
- ⑦ 「源氏物語」は一見高貴で優雅に思える当時の宮中の暮らしが、実は虚しく移ろいやすいものに過ぎなかったことを、男女関係を軸にして描いた。恋愛小説の形を借りた政治小説と言われる。
- ⑧ 大友皇子は物心ついたころから学問を好む、知的ながらも決まりを守らぬマイペースな幼児だった

#### 4スピーチテーマ

- ①A 平等院鳳凰堂 B ロケ地 C 墓参り
- ②A 京都御所 B 檜皮葺 C 多宝塔
- ③A 十五夜 B 漢詩 C 紫式部